

園番号 703

令和2年度 奈良市立左京こども園 研究実践概要

園長名 鍋谷 理佐子
全園児数 153 名

1. 研究主題

心豊かに生き生きと活動する子どもの育成
—子どもが自ら遊びはじめる環境構成と援助の工夫—

2. 研究年度 2 年度

3. 研究主題設定理由

子どもたちは、明るく素直で自分の思いを言葉で表現しようとしているが、友達や周りの人に分かるように自分の思いを伝えることや、相手の思いを聞くなどのコミュニケーション能力の乏しさがみられる。子どもが自ら遊び、主体的な遊びが展開されることで子どもたちの関わる力が育つと考える。「明日も遊びたいな」という意欲を持ち、主体的に生き生きと遊び活動するためにはどのような環境構成の工夫や援助が必要であるのか研究したいと思い研究主題に設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもが「明日も遊びたい」という意欲を持ち、自ら遊びはじめる環境構成と援助の工夫と、大切さについて探り、心豊かに生き生きと活動する子どもを育てる。

②研究の重点

- ・子どもの発達過程を捉え、子どもが興味関心をもって主体的に遊べるための環境構成や援助について考える。
- ・研究主題について日々の保育実践の振り返りの中で共通理解を図り、研究を進める。

③活動の方法

- ・子どもの年齢、発達に応じた環境構成、援助を行い、子どもの興味、関心を捉え柔軟に対応していく。環境構成・援助 (.....とする)

3歳児 【葉っぱいれたらいいやん】

秋になり、どんぐりなどを拾って登園する子どもも多くなり、段ボールをすべり台のようにして、どんぐりを転がす遊びを楽しんでいた。段ボールだと上手く転がらないこともあり、もっと滑りやすいものはないかと保育者がすべり台を準備しておいた。すると、すべり台に興味をもち滑ってみる子どもがいた。

すべり台の近くに置いてあったどんぐりを拾って転がしている様子を見守り、保育者が「どんぐり転がったね。もっといっぱい転がしてみる？」と声を掛けた。すると洗い桶を持ってきて、どんぐりをたくさんいれて、流そうとする子どももいた。がらがらと大きな音が鳴り、周りにいた子どもも様子を見にきた。「いれて」「いいよ」と何人かの子どもが集まってきた。

どんぐりをもって滑り台に上り、「いくでー」とどんぐりと一緒に滑る子どももでてきた。保育者が「どんぐりと一緒に滑りっこだね」「どっちがはやい」と声を掛けると、A児「ぼくがはやかったで もう一回」と繰り返し遊びが始まった。その様子を見ていたB児が「ここに葉っぱいれたらいいやん。プールにしたらいいんちゃう。」とアイデアをだした。保育者が「いいね。葉っぱあるよ。入れてみる」と声をかけると、B児「うん いれよう」と落ち葉を集めていた袋を保育者と一緒に運び、滑り台のところへいれ、滑り台を滑り始めた。

滑り台が終わった後も葉っぱを上投げて遊ぶ様子が見られた。周りの友達も入れてと一緒に滑り始め、落ち葉を上投げたり、滑り台から滑って友達に掛けてみたりと遊ぶ姿が見られた。保育者も一緒に落ち葉を上投げたり、滑ったりと子ども達と一緒に繰り返し楽しんだ。



(評価)

- ・「葉っぱを入れてみたい」やってみないと保育者に伝え遊びが実現できたことで、遊びの満足感が得られた。また、友達が遊んでいる様子を見て、同じ遊びをしたい「いれて」と一緒に同じ遊びをする楽しさも感じられた。また、どんぐりを転がす、一緒に滑るという遊びを繰り返し楽しむことができた。
- ・落ち葉遊びを計画し、事前に落ち葉を集めておいたことで、子どもの声をすぐに実現することができた。

4歳児 【こっちは2階】

10月ごろになると、友達と一緒に砂遊びやままごとを楽しむ姿がみられた。さら砂やごちそうをつくっては、保育者に見せたり友達に見せたりするものの友達と思いを伝え合う姿はあまり見られなかった。

いつものように保育室前でままごとをしていたところに、保育者が大きな段ボールを半分に切ったものを準備した。「わあ、お家みたい」「こっちドアにしよう！」「いいね」「先生、ペン使ってもいい？」と言って、段ボールに好きな絵やドア、窓など思い思いにかき始めた。「ここのドア？いいね。本当のお家みたいだね」と声を掛け、子どもがかいたドアや窓の線通りに段ボールカッターで切り開いた。「すごい！」と言って、ドアを開閉したり、友達と一緒に出入りしたりし喜んで遊んでいた。保育者がまた「こんな段ボールもあるよ」と言って、小さな段ボールをいくつか準備すると、大きな段ボールの上に乗せ、「こっちは2階ね！」

と言う子どもや、「見て！こっちはトイレ」と言って別の段ボールにトイレのレバーの絵、“おしっこ”“うんこ”などをかく子どもなど、楽しそうに見せ合っていた。「お風呂もつくろうよ」「先生、段ボールもつとある？」と言い、保育者が準備すると、大きな円形につなげ、シャワーやボトルの絵“りんす”などかいて友達と笑いあう姿が見られた。



その後も段ボールの切れ端でピザやお家の鍵をつくったり窓にスズランテープでカーテンをつけたりして楽しむ姿も見られた。3学期になってもお気に入りのお家は大事にしており、段ボールが色あせてきてもリフォームを繰り返し遊びは続いている。

(評価)

- ・いろいろな大きさの段ボールを準備したことで、考えたことを伝え合い友達とイメージを共有して遊ぶ楽しさや、つくる楽しさとつくったもので遊ぶ楽しさも味わうことができた。
- ・保育者は遊びのイメージが広がるように、子ども同士で遊びを展開させている姿を見守りながら、タイミングよく必要なものを準備したり子どもの思いを実現できるよう援助したりしたことで、遊びが継続し自ら遊ぶ姿につながった。

5歳児 【スイーツ屋さん】

遊びの中で、ひとりひとりこんなことが「やってみたい！」という思いはあるが、明日も続きがしたいという姿はなかなか見られなかった。そのため、子どもたちが、「明日も遊びたいな」と思えるようにするためには、どのような環境構成や援助が必要なのか考えてみた。

子どもたちの様子を見てみると、様々なものに興味をもち、触って試してみる姿が見られたので、ある日、遊びの中に紙粘土を出してみた。すると、乾いたら固まるという性質の面白さに惹かれて、「ケーキつくる！」「みてみて団子つくった」などのスイーツ作りを楽しむ姿が見られた。しかし、つくることに満足してしまい十分につくったところで遊びが途切れてしまった。そこで保育者が、「みんながつくった作品どうする？」と問いかけ、クラスで話し合いをした。その中で、「せっかくつくったからみんなに見てもらいたい」「並べてスイーツ屋さんにしなさい」という声もあり、スイーツ屋さんをしようということに決まった。初めは、保育者が「レジをつくってみる？」という提案から「いいね、いいね」となり、自分たちで材料を選んでレジをつくることから始まった。しかし、次の日には、保育者が誘いかけないとなかなか遊びが始まらないなどの姿が見られたため、子どもたちの遊びの様子や話し合いで決まったことを、写真と一緒に文字にして遊びの記録を振り返られるような遊びの本を作成した。初めは写真に写っている自分を見つけることを楽しんでしたが、続けていくうちに、「ジュースのラベルをつけてみたら、お客さんにわかりやすいかも」「今さ、Paypayでお支払いできるからそれつくろう」と自分たちで遊びに必要な物を見つけ、作り始めるようになった。また、友達の気づきに「いいね、面白そうだね」と共感する姿も見られるようになってきた。

このように、遊びの展開を「見える化」して子どもたちに提示してみることで、子どもたちが「明日も遊びたいな」と思い、継続して遊ぶ姿が見られるようになった。



(評価)

「やってみたい」「したい」という思いはあるが、遊びがなかなか継続しなかったため、もう一度クラスの実態を見直し、「明日も遊びたい」につながる援助を考えた。子どもたちの特徴として、1つめは、みんなに伝えたいことがあるという子が多いこと、2つめは、自分の発見や気づきを認めてもらいたいという気持ちが強いということ、3つめは、写真を撮っていると「見せて見せて」と映っていることに興味を持っている子が多いという姿が見られるので、子どもたちの遊びの様子を写真と文字でまとめ、遊びの本をつくり、遊びの展開の「見える化」を試みた。子どもたちの特徴を捉え、クラスの興味・関心に合わせた環境を用意したことで、「明日も遊びたいな」と感じ、継続して遊ぶ姿につながった。また、朝から遊びの本を置いておいたことで、自分たちでいつでも好きなときに見られるようになっていたこともよかったと思う。

5. 研究の成果

3歳児は見守ったり思いを受け止めたりする保育者がそばにいることで安心して遊びを楽しめる。また、繰り返し遊ぶことで満足感を味わい、「楽しい」「もっと遊びたい」という気持ちにつながった。4歳児はタイミングよく環境を準備したり、声かけしたりする事で、友達と一緒にいる心地よさを知り、自分の思いを伝え、友達を認め合いながら共通の目的をもち、イメージを広げて遊ぶことができた。5歳児は遊びの展開を写真など「見える化」することで、「やってみよう」「試してみたい」と思うような関わりができるようになってきた。子ども同士が意見を出し合い友達と一緒に協力して、作った物が形になってきて、達成感を味わうことができた。遊びを展開していくためには、「楽しい」「やってみたい」と思えるワクワク感を感じる環境を作ったり、子どもの気づきや疑問に思った子どもの姿を捉え、タイミングよく素材を準備したり、言葉かけをすることで、好奇心・探求心が深まっていった。その中で、子どもの思いを受け止め、環境を子どもと共に創っていく大切さを感じた。

6. 今後の課題

子どもの発達段階や個人差を理解し、子どもの興味や関心、遊びの様子を捉え、環境構成や援助を工夫することが大切と感じた。子どもの気づきを共有し、試したり探究したりする機会をもち、子どもたちが夢中になって遊ぶことができるようにしていきたい。心豊かに生き生きと遊ぶ子どもを育むために、保育者間で保育の振り返りを行い連携を深め、引き続き取り組んでいきたい。